

名古屋大など 飛行機で観測

今月、日本列島を通過した台風21号に、名古屋大と琉球大などの大学が飛行機で近づき、目の

壁雲」と呼ばれる積乱雲があつた。

夕収集に成功した。このよだな強い台風を日本の飛行機で直接観測したのは初めてという。

観測に当たった名古屋大の坪木

和久教授（気象学）によると、観

測は21日と22日、台風に向けて鹿児島空港を離陸。21日は午後2時半ごろ、沖縄の南の海上にあつた台風21号に接近し、高度約13キロ

上空で台風の雲を突き抜けて目の

中に入った。22日は台風が四国

南方まで進んだところで再び突入

した。

直徑90キロほどはあるとみられる

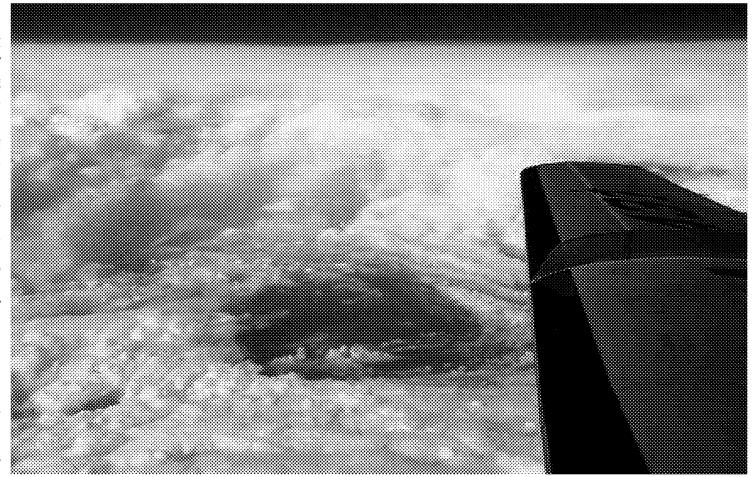
目の中に入ると、上空に青空が広

がり、海面からそびえ立つ「目の

ぞいた。

飛行機から撮影された台風21号の目の中（21日、沖縄の南の海上）

名古屋大・坪木教授提供



台風21号の「目」に突入！

壁雲」と呼ばれる積乱雲があつた。眼下には大きな白波の立つ海面もございた。飛行機から「ドロップゾンデ」という観測機器を投下して計測すると、中心気圧は920.9925ヘクタールで1959年の伊勢湾台風の上陸時よりも低かったといふ。

坪木教授らは計26個の機器を投下。得られた気圧や気温、湿度、風速などのデータを基に、台風の強さや進路の予測精度を高める研究を進める。

坪木教授は「地球温暖化に伴い、

勢力を落とさずに日本にやってく

る台風が増えていく。大規模な避

難を考える場合には正確で効果的

な予測が不可欠で、直接観測を重ねて精度を高める必要がある」と話している。

飛行機から撮影された台風21号の目の中（21日、沖縄の南の海上）

名古屋大・坪木教授提供